

総合型教科書のタスク分析

桑原 直子

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2011年10月1日 受理)

はじめに

言語教授法は文法中心主義からオーディオ・リングリズム、そしてナチュラルアプローチへとコミュニケーション重視の方向で流れてきた。その流れの中、日本語教育の分野で、コミュニケーション重視の側面が重視され始めて久しい。岡崎(1990)は、コミュニケーション・アプローチの歴史を述べた上で、「従来の伝統的な言語の教室では最も軽視されてきた欲求といえる学習者の社会性への注目」を提案するとともに、「自己表現あるいは他者理解」という「願望をてことした人格交流をコミュニケーションの源泉として位置づける」必要性を説いている。清水(1992)で述べられているように、「各教育現場では、せめて少しでも発話動機を高めようと、様々な手法が使われるが、学習初期の発話を真に自発的にコミュニケーションなものにするにはかなりの努力が」必要となる。そこで、コミュニケーション・アプローチの練習形式として教室で用いられるのが「タスク」学習である。「タスク」学習は、クラスの中で学習者の限られた文法能力と伝達能力のバランスをうまく取りながら、「自己表現」あるいは「他者理解」を図っていく手段のひとつとして位置づけられ、その課の学習項目を用いながら、学習者の「自己表現」を促進させていくことに重きがおかれる。本稿では、基礎文型を学習後、新たに文型を習得しつつ、自発的な会話力を高めていく段階である、初中級レベルの総合型教科書で使われる「タスク」を分析し、ひとつひとつの「タスク」がいかに働き、学習者にどのような学びを与えるものであるのかを見ていくこととする。

1. 「タスク」について

高見沢(1997)では、「タスク」練習とは、「目的(=課題)を設定して、その目的を達成する過程が学習にあるような練習方法であり、クラスでの言語構造の学習から社会での実際的な使用を目指す活動に発展させるための練習」であるとしている。

岡崎(1990)はタスクの目的について、言語上、学習上、インプットの処理上とインターアクション上、教室外のコミュニケーション上、異文化間のコミュニケーション上という5つのレベルがあるとする。清水(1992)はこれを取り上げ、言語上の目的とは学習項目となっている文型を使いその機能の範囲を広げること、学習上の目的とは、学習者が持っている言語能力を活用し生きたコミュニケーション能力の幅を広げること、インプットの

処理上とインターアクション上の目的とは、活動に必要な内容で、語彙・構造の習得や内容・テーマの把握と伝達をさし、教室外のコミュニケーション上と異文化コミュニケーションの目的は、主に学習者の動機の向上にあると述べている。

阿久津（1992）は岡崎（1990）を取り上げタスクの見方として以下の3つを挙げている。

- (1) 教育的配慮に中心をおいたタスクの見方
- (2) 言語学習を作り出すことに中心をおいたタスクの見方
- (3) 実生活に中心をおいたタスクの見方

(1) はある学習項目を習得させるために学習者に何かをさせることをタスクとしたものであり、(2) はタスクをその「学習」を作り出す一連の作業の一部としてとらえたものである。そしてこのようなタスクの果たす役割として、「構造練習で学んだ知識を発展させ、その理解をもとに、実際の場での生成ができるように運用能力を養成する」ことを挙げている。

清水（1992）では、Nunan（1989）を取り上げ、タスクを構成する6つの要素を紹介している。それらは、目的 (goal)・インプット (input)・活動 (activities)・教師の役目 (teacher role)・学習者の役目 (learner role)・設定 (settings) である。清水はこれらの要素のうち、教師の役目・学習者の役目・設定は活動の下に位置づくと考え、具体的にタスクを考える際には、目的→インプット→活動→評価→目的と循環していくことの必要性を説いている。また新谷（1992）ではNunan（1989）の「テーマや学習方法が理論的につながっていないといけない」という指摘をうけ、タスク練習においてテーマ統一されているという点がタスクの連続性をより明確にし、学習者により高い動機付けを与えるという考えを述べている。

つまり、タスク練習とは、学習動機を高め、構造練習で学んだ知識（語彙・文法）を発展させ、その理解をもとに実際の場でのコミュニケーションの幅を広げることが目的とされている。そして、より高い学習効果をもたらすためには、連続性のあるタスク練習が、目的→インプット→活動→評価→目的と循環していくことが必要となるのである。

2. 教材でのタスクとその分析

では、実際に初中級総合型教科書の中で、どのようなタスクが用いられ、学生はそれらをどのように処理し、どのような学習効果が見られたのか、タスクの分析を試みたい。その際、タスクをⅠ：タスクのタイプ、Ⅱ：タスクの持つ要素、Ⅲ：タスクの効果という観点から見ていきたい。なお、タスクのタイプとタスクの持つ要素については、先行文献を参考とし、以下のように考えることとする。なお、本稿では、倉敷芸術科学大学留学生別科で用いられた4冊の総合型教科書にみられるタスクについて調査、分析する。

対象教科書：『ニューアプローチ中級日本語 基礎編』『J BRIDGE』

『中級へ行こう』『中級を学ぼう』

2-1 タスクのタイプ

タスクのタイプについては清水(1992)の分類を用いることとする。清水(1992)ではタスクは以下の3つに分類できるとしている。

- ①ギャップが存在しないもの
- ②人工的にギャップが作られ、あたえられているもの
- ③個人的な見解・意見の差、ないしは各個人特有の情報によって生まれる自然なギャップを利用するもの

①は、学習者に同一の絵等を与え、学習した項目を用いてそれを描写させるようなものである。②は、学生に異なる文をも読ませるなどし、人工的に作ったギャップをもとに情報交換させるものである。③は各学習者が持っている異なる文化背景や感想、意見を前提としているものである。

2-2 タスクの持つ要素

タスクの要素については、新谷(1992)の挙げる、タスクの持つべき4つの要素を用いることとする。

- ①動機・意味・必要性：タスクを行う意味・必要性がわかることがそのタスクに取りくむ動機を生む。
- ②活動の流れ：日本語を一連の流れ、状況、コンテキストの中で使うことで、どのようときどのような語彙をどのような機能をもって使えばいいのかが理解しやすくなる。
- ③四技能の連動
- ④大人の知的作業：タスクの課題やテーマを知的なものに設定し、それを達成するために必要な作業を日本語を使いながら行うことを学習課題とすることで、幼稚な練習ではなく知的作業になりうる。

なお、④については阿久津(1992)でも、学習者の知識、認知的、社会的能力を生かせるものであることが必要であるとしている。言語的にレベルが低い場合には練習は「子供っぽく」なりがちだが、対象者が大学生レベルである場合、学習者がすでに持っている能力を利用できるよう心がける必要がある。

3. 総合型教科書にみられるタスクとその効果

3-1 教科書にみられるタスクのタイプについて

各教科書にみられるタスクのタイプは以下である。

	タイプ①	タイプ②	タイプ③
ニューア プローチ	本文設問 単語練習 文型練習 聴解ミニテスト	なし	作文練習 個人化したトピックや国と国を比較するトピックなどを用い文章化する

J BRIDGE	聴解練習 適切な語彙を____ に書き入れる 文型練習	ロールプレイ 営業マン、商社マン、 目撃者、刑事などと なり会話をする	はじめに 個人の情報、経験、意見などを話し合う ペアワーク 個人の情報を交換する
中級へ 行こう	本文読解 語彙練習 文型練習	なし	文型練習 個人情報を組み込みながら文型練習が できる箇所がある 作文 個人や出身国についての情報を書く
中級を 学ぼう	語彙練習 文型練習 本文読解 聴解練習	なし	書こう・話そう 個人の情報、意見を文章化する 作文 個人の経験や意見を文章化し、互いに読 み合う

3-2 教科書にみられるタスクの要素について

各教科書にみられるタスクの要素は以下のようであった。

	要素①	要素②	要素③	要素④
ニューアプローチ	○	○	△	○
J BRIDGE	○	○	○	○
中級へ行こう	○	○	○	○
中級を学ぼう	○	○	○	○

- ①動機・意味・必要性：各教科書ともに、課ごとのテーマが決まっており、テーマに沿った語彙、本文を用いることでタスクに一貫性が生まれている。
- ②活動の流れ：各教科書とも課ごとのテーマに沿って語彙練習、文型練習、聴解練習等が組み込まれており、活動に一連の流れが生まれている。
- ③四技能の連動：総合型教科書であるため、4技能を高める様々なタスクが取り入れられているが、「ニューアプローチ」では学習者の自主的な発言を引き起こすタスクの割合が他の教科書に比べ低い。
- ④大人の知的作業：各教科書ともに、テーマが日常生活、観光、文化、推理などと多岐に渡り、日本語能力とともに、新しい知識も習得できる内容となっている。

3-3 タスクの使用とその効果

タスクのタイプ①について、今回調査した総合型教科書では語彙や文型の導入が大きな目的となっているため、語彙や文型練習が多く組み込まれていた。これらは、個人個人のギャップが存在せず、自発的な発想を起こしにくいいため、やり方によっては、ただの単純作業となってしまう。使用にあたり、教師が導入したいと考えている語彙・文型がうまく取り込まれたタスクで「語彙・文型」を「どのような文脈で使うのか」を、学習者の意識の中で直接結びつかせることが非常に重要となってくる。また、毎回の授業で行うタスク

を定め「タスクの連続性」を持たせることが、習得への高い効果をもたらすと考えられる。時には「練習」というよりも「ゲーム」という感覚で取り組みなどすれば、「間違えてはいけない」という学習者特有のプレッシャーを取り除き、情意フィルターを下げることとなる。その結果、安心して楽しみながら取り組んでいる学習者の姿が見られるであろう。

タスクのタイプ②については、『J BRIDGE』の中にロールプレイがみられ、『中級を学ぼう』では、会話による文型練習の中に、個人化した情報を組み込んで練習する形式がみられた。教室活動では、『J BRIDGE』にみられたように、コンテキストから切り離されたパターン練習や場面でのロールプレイを用いることが多々ある。しかし、このタスクでは個人化した情報を用いることができない。対して、『中級を学ぼう』でみられた会話形式のタスクでは、実際に自分がしたいことを語らせるという点で、学習者が興味・関心を持っていることに関する語彙が自然と頭の中に入っていくという効果があると思われる。使用したい語彙というのは個人個人様々であることを考えると、自分の興味・関心に引き付けて語彙を覚えて、更にはそれを産出していく機会を与えることは非常に重要なことであると思われる。

また、タスクのタイプ③「個人的な見解・意見の差、ないしは各個人特有の情報によって生まれる自然なギャップを利用する」について、どの教科書も課のまとめとしての位置づけであろう「作文」の中で取り込まれていた。さらに『中級へ行こう』『中級を学ぼう』では文型練習の中にもこのタイプが見られた。

例) わたしの国で代表的な_____といえば、()です。

「中級へ行こう」P5

今は_____より_____が大切だと思っている。

「中級を学ぼう」P35

学生たちは「言語力」以外の様々な能力を持っている。この個人化に焦点を当てたタスクは「言語」的な課題を優先するのではなくむしろ「内容」が優先されている。このような「内容」を優先したタスクでは、学習者は社会的な常識や、体験、考えなどの言語力以外の能力を総動員させ課題をこなしていかなければならない。そういった面で、これはまさに「大人の知的作業」としてのタスク練習である。また、個人の興味・関心に的を絞り、文を構成していくという作業を通し、自分が知りたい語彙をインプットしていくことができるという利点に加え、クラスメートの発表に耳を傾けることで、その他の語彙も確認することができ、語彙の幅を非常に大きく広げるという効果が見られる。また、国籍の違う学生が在籍するクラスでは、タスクを個人化することで、話し手は、母国文化や国の様子、各自の考え方を複眼的に見るための情報をクラスに提供できる立場にあり（「自己表現」）、聞き手は国際色豊かな文を目にし、耳にする機会に恵まれてくる（「他者理解」）。これは日本語学習が文化的、社会的側面の考察をも包括したものとして機能しており、学習者は言語はもちろんのこと、それ以外の多くのことを学ぶことができるに違いないと思われる。

これは話し手・聞き手双方にとって「意味のある産出」をもたらすタスクであり、非常に重要な活動であると思われる。

おわりに

今回調査した教科書では、ギャップがないタスクがその多くを占める中で、ギャップを用いたものについては、人工的にギャップを作るタスクはほぼみられず、その大部分が個人的な見解・意見の差、ないしは各個人特有の情報によって生まれる自然なギャップを利用したものであった。これらからは、学習者個人の興味・関心に直接結び付きやすい言葉から学習するという自然な流れの中で語彙の習得が進んでいくという効果、および、発表を通して学習者間の相互理解（「自己表現」「他者理解」）をもたらすという効果が考えられる。そして、個人化した文章を書かせるにあたり、ただ言語の構造を教えるのではなく、むしろ学習者の社会的常識や体験、考察を総動員させる「内容」を優先した活動となる。実生活のコミュニケーションで「言葉」を伝える際にわたしたちはどうしても「意味・内容」を伝えなければならない。そういった意味で教室という空間の中に、言葉のみの学習ではなく、内容に焦点をあてた練習場面を作り出すことは非常に大切なことであると言える。また「内容」を重視する活動のもう一つの効果として、成人学習者が自分の知的レベルを落とさず言いたいことを言おうとする「大人としての欲求」がうまく機能し、そのために必要な語彙を身につけようとする動機につながっていくことが考えられる。

タスクの目的が、学習動機を高め、構造練習で学んだ知識（語彙・文法）を発展させ、その理解をもとに実際の場でのコミュニケーションの幅を広げることにあるとするならば、今後教科書のタスクを考えるに当たりキーとなる2点は、①教室内でどのように「表現の場」が作れるタスクであるか、②いかに「意味のある産出」をさせることができるタスクであるかであろう。「文脈」の中で内容のあるコミュニケーション活動を作り出すことのできるタスクとはどのようなものなのか。それについて更に考えを深めていくことを今後の課題としたい。

参考文献

- 岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社
- 新谷さゆり・藤牧喜久子（1992）「新開発教材におけるタスク作成(3)初級後期のトータル・タスク」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』
- 清水百合・山本そのこ（1992）「新開発教材におけるタスク作成(2)初級後半の小規模なタスクについて」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』
- 阿久津智・酒井たか子（1992）「新開発教材におけるタスク(1)初級前期を中心に」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』
- 鈴木潤吉（1999）「コミュニケーション・タスクにおける言語形式の意識化に関する研究」『北海道教育大学紀要』當作靖彦（1988）「聴解の能力の方法と教材―聴解のプロセスを考慮した練習」『日本語教育』64号（pp59-73）

A Task Analysis of the Textbooks in Intermediate Level of Japanese as a Foreign Language

NAOKO KUWAHARA

*Course in Japanese Studies for Students from Overseas,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*
(Received October 1, 2011)

In this paper, I analysed tasks which appear in the four Japanese textbooks for the intermediate level. I used Shimizu (1992) to categorize the tasks and analysed how each them works in language education and how students use the tasks for their learning in the classroom.

While most of the tasks focus on exercising grammar, several are designed to let the students express their personal information or opinion. Not only do these tasks promote language acquisition but also help to bring mutual understanding between the students in the classroom. Textbooks need more of such tasks in the intermediate level. The main points in constructing such tasks are e.g. to create opportunities for students to express their opinions and personal information; and to make them produce target grammar and vocabulary in a meaningful way.